洛友會報

京都市左京区吉田本町
京都大学工学部
電気系教室内
洛友会

歓迎のご挨拶

洛友会会長　松田長三郎

目出度く母校・京都大学をご卒業になり、本会へご入会下さいました皆さんに、心からお祝いとお慶こびを申し上げます。本会は京都大学電気・電子関係諸学科及び電気工学講習所卒業生を会員とするもので、我国の電気・電子関係の諸方面に活躍しておられる多数の方々を輩出して来られましたことは、私共の大きな慶こびであり、誇りでもあります。願はくは、ご健康に十分ご注意下さいまして、斯界のために益々ご貢献下さいますようお願い申し上げます。

去る四月十一日、京都大学では、本年度の入学式が挙行されました。各学部への入学者は、次表に示したように、合計二七〇五名で、そのうち、女性は二八一名、約一割強が女性であることは今後の動向を知る意味においても甚だ興味あり、大切なことで、女性は、なかなかしっかり勉強されます。両性相携えて文化の興隆に貢献して頂きたいものです。

今、我国は経済大国として世界の注目を集めるようになって来たことは、大変お目出度いことであり、更に道義国家・文化国家としても世界の賞讃を得たいものです。

学部	入学者
文学部	200 (50)
教育学部	60 (23)
法学部	401 (54)
経済学部	238 (14)
理学部	291 (15)
医学部	120 (8)
薬学部	80 (32)
工学部	1,001 (29)
農学部	314 (56)
合計	2,705 (281)

（　）内は女子で内数

私が始めてヨーロッパへ行ったのは昭和六年で、フランスのマルセイユまで三五日の悠々たる船旅で、それからパリ経由、あこがれの伯林に着いたのは昭和七年の元日の朝でした。元日の事とて、誰れにも知らせず、伯林入りをして、駅前のタクシーに伯林第一のホテルへと云いましたら、ホテル・アドロンと云ふのに着けて呉れました。伯林大使館主催の新年会に出席した際、大使から、どこにお泊りですかと聞かれて、ホテル・アドロンと答えましたら、あそこは政府の高官や大実業家の泊まられる所ですと、暗に、大学の若い助教授などの泊まられる所では無いと云はん許りの口ぶりでした。成程立派なホテルで、元日でもありますので、広い大食堂のお客は、私、一人で、左右の後ろには食事及びワインを給仕するヘヤ・オーバーが附いていて、まるで東洋のプリンスのような待遇を受けました。これは半世紀も前の、在りし日の誇らしい思い出の一コマです。

日進月歩の電気・電子工学の世界は刻々と進展していますし、今後益々広汎多岐の応用の道を開拓して行くことと思はれます。その将来の開拓の荷い手は、皆さんのような若い方々であります。私共は、大きな期待を以て、皆さんのご活躍を待望している次第です。ご健康をお祈り申し上げます。

春宵　洛北に帰って想う

洛友会副会長　大谷泰之

今春の桜の開花は少しおくれていたが、去る四月中旬の日曜日の洛中洛外はポカポカ陽気の好天となり絶好の桜日和。円山公園・嵐山・清水寺、そして銀閣寺の疏水端等何処も花も人も満開であった。筆者の住んでいる洛北へも桜前線が北上して、八瀬園地も満開に近く大原の里はまだちらはら咲き、そして今月下旬には比叡山ケーブル沿いの桜も頂上に向って登り終り、洛西御室の八重桜も満開を過ぎ、やがて青葉が燃えてくる。これが京都の桜の花だよりである。

筆者はこの三月末、八年間の福井高専校長生活を終えて洛北岩倉にある住居に戻り、漸く総ての後仕末もすませた四月半ばの宵、洛友会事務局の竹村さんから依頼された原稿に筆を走らせている。

次に洛友会会長松田長三郎先生は昨年のお体の不調も回復され、本号にある先生の（巻頭言）お話の通り、例年通り母校の入学式にも元気に列席されたが、昨年十一月二十八日九十二才の高令を迎えられた松田先生は京大名誉教授の中の最長老であることは皆さんご承知の通りでる。松田先生が理事長をしておられる近畿地方発明センターで筆者もお手伝いをしている関係で、月に二、三回は先生にお会いする機会もあるが、昨年来先生は医者の勧めで遠方へは出かけられないものの、発明センター其他へは時々お越しになり、昔話しを伺うことも多い。今後共にご自愛になって洛友会のシンボルとして尚一層のご長命を祈っている次第である。

さて私事を述べて恐縮であるが、筆者は洛北に生れ育ち、昭和十三年母教室を卒業以来ずっと電気工学教室に在職し、五十一年に定年で退官、その後二年間私立福山大学の創設時のお手伝いをして後、五十三年六十五才の時福井県鯖江市にある国立福井工業高等専門学校の校長に就任、中学校卒業

生を五年間で実践的技術者に育成する工業高等教育に携って以来八年間、幸い健康にも恵まれ何とか大過もなく本年三月末に退任することができた、これは恩師はじめ洛友会の皆様方のご激励とご支援の賜と心から感謝している。この八年間筆者は生れて初めて京都から福井へ居を移したものの、半分位手伝いに来てくれた家内共々週末には殆んど帰洛するという旅鳥的な生活を七十三才の今日迄続けてきた。

その間、福井の五六豪雪時深さ二m、比重〇・四という重い雪を校舎屋上から降す作業に教職員学生共々老骨にむち打って頑張ったことや、大学時代とは全く異質のワンマン的な幅広い教育管理生活に苦労したこと等を思い出している。昭和四十年に創設され、機械・電気・工業化学・土木の四学科、学生総定員八〇〇名、教職員合計百二十数名という福井高専の整備充実と発展に向って、誠心誠意、絶えず見直しと改善を先取りして進めることに努力を傾注して八年、その目標を曲りなりにも八〇%位達成出来て、次の第四代校長として京大大型電子計算機センター長の土木工学教室丹羽義次教授を定年一年前に迎えることができて、四月中旬校長の交替式を終え、学生代表から貰った花束を抱えつつ全学生教職員の拍手に送られて式場を後にした時の感慨深い思い出はいつまでも残ることと思っている。広い校長官舎での生活では、時には近くのスーパーで求めた食料で一寸した料理を作って晩酌を楽しんだり、自作の弁当で昼食をすませたり、一杯やった後の夜はからっきし駄目な代りに早朝からその日の準備に追われるといった生活を続けていたが、今では自分乍らよくやってこられたものと感謝している。一方全国で五十四校ある国立高専の協会の理事や管理運営委員会の主査、そして副会長等も務めたので、上京その他の出張や毎週末帰洛する回数も多く、地域の国鉄駅長から、出来れば表彰したいとも云われたものであった。

高専の在学生は孫位の若さで女子学生も若干在学していることもあり、筆者はお蔭様で健康にも恵まれ、随分若く見えると云われて自分でも嬉しくなったことも多かった次第、それでも時には七十才を過ぎた年令の疲れを感じることもあった。それは重い書類等を手と肩にして、京都駅から烏丸通りの地下鉄に乗り昔の烏丸車庫にある北大路駅の長い六十段以上の階段を一気に登り切れない時、又タクシーに乗って息切れし乍ら漸く行先を伝えることができた時など、やはり年令を感じさせられたものであった。

高専校長生活は筆者にとってやりがいのある第三の人生であったことを心から感謝しているが、云わば筆者にとって第三の卒業式を終え陽春の洛北へ帰った今、卒業は次の学習開始とよく云われているように、筆者もこれからは七十の手習として趣味やワープロの学習も始める積りであり、勿論松田先生が理事長をしておられる発明センターのお手伝いの外、洛友会、電気評論そして近々発足予定の財団法人等も出来るだけお手助けしたいとも考えているが、やはり筆者より二十才年上の松田先生にあやかって、健康に留意しつつ何とか有意義な余生を送るべく心掛けているので、今後共に皆々様のご支援ご鞭撻をお願い申し上げる次第である。

以上長々と私事に触れさせて頂いた勝手をお許し願うとともに、約十年間京都を離れていて、洛友会の皆様にもご無沙汰勝ちであったことをお詫びして擱筆する次第である。

昭和61年度洛友会総会通知

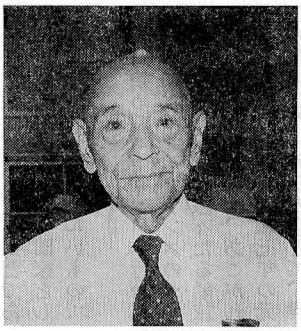
一、年　月　日　昭和61年6月7日（土）
一、場　　所　新ミヤコホテル（京都駅八条出口前）
一、行　　事　(1) 関西支部総会　15・00～15・30
　　(2) 本部総会　15・30～16・00
　　(3) 懇親会　16・00～18・00
一、会　　費　会員　三、〇〇〇円
　　同伴者　一、五〇〇円

ただし、昭和六十一年三月卒業者は無料

会費は、別紙総会用振替用紙にてお払込みください。なお、これで総会出席通知に代えますので、ご出席の方は五月二十日までにご返事をお願いいたします。本会へはご家族同伴を歓迎しますので、多数お誘い合せの上ご出席ください。

故立石亨三氏を悼む

講大正14年卒　森　芳郎



大先輩立石亨三氏は、あのお元気で温厚なお力をもって我々同窓後輩共を引張り廻して頂いて居りましたが、このたびその御手をはなされこれからはお姿を拝することの出来ない悲しい時が遂に来てしまいました。我々同窓生の名簿の順から見ても、又実際のお力から見ても第一番目の位置に立って、常に母校や諸先生に対する尊敬と感謝の念を忘れることなく、又同窓生同志の親しい関係を結びつけて貰って居りました丈に、只茫然として途方にくれて居ります。

立石先輩御自身の御事業については御立派な御令息を中心に「鉄を愛して生活の向上を計りよりよい社会をつくりましょう」を社憲として御発展を続けられ少しも御心配ない事とは存じますが、外部の社会的な諸団体の幹部として日々御多忙を極められ席の温まらない毎日を過して居られました事は皆様のよく御承知の通りでございます。又我々同窓の集りについては常にその中心となり、そのあとを継ぐ若手同窓生がよく先輩の御本意を理解して、丁度十年前、洛友会中の一クラス会とも云うべき講習所卒業生の固い団結である洛友デルタ会を結成致しましたが、

それ迄の長い戦後空間の同窓の交りについては必ず立石先輩の音頭に依り集りました。

それ等が、みのり前述の団結を確立した時の第一回の集会の席上で誰云うともなく立石先輩に対する感謝の意を何かの形で表わしたいと云う発言があり出席者全員の同意を得ました。ところが此の席に居ないが同じ気持の同窓生も多くこゝで丈片つけることなく全会員に呼びかける事と致しました処、こぞっての多数参加を得、盛大に此の事業を完了しました。立石先輩に対し同窓生一同が如何に感謝して居るかと云う事がよく分りました。

立石先輩の御気持を引継いだ若手同窓を中心にこれからも変らぬ交流を続ける覚悟で居ります。会員数の増えることのない洛友デルタ会の堅実な団結を続け、洛友会の発展に貢献する覚悟を固く持つ我々を見守って頂く事をお願いし、御冥福を祈って居ります。

大正十四年卒

一本松珠璣氏の「我が歌」

日立電線
大正十五年卒　小宮義和

わが国の原子力発電開業の功労者、一本松珠璣氏の一周忌追悼会が、「昭和六十一年一月二十一日の夕、東京の日本工業倶楽部で催され、令息一本松康雄氏から故人の遺歌集「我が歌」が参列者に贈られた。

この遺歌集には昭和十六年応召の「征旅歌日記」二十六首から、昭和五十五・六年の奥様の入院御看病の歌二十一首まで、合計二百六十一首が収められている。生涯の実作はこの十数倍もあったように思われるが、その中から自撰して毛筆で墨書されたものをそのまま版にされている。一本松氏独特の達筆で濶達自在に書かれているが、はじめの一六〇首はまだお元気な頃の筆蹟で、最晩年になるとその筆力の稍々衰えを見せているのは、奥様に対する御心労と、御自身の御健康のあとがうかがはれる。

圧巻は昭和四十年十一月十日の「東海発電所初送電」で、この時の様子はテレビで放送されたし、この六首は新聞紙上でも紹介された。

東海の暁は来ぬ待望の原子電力東京に今や
涙もて皆眺めをりメーターの示す待望の原子電力
初送電成りし瞬間一せいに一杯の拍手一杯の笑顔
ひたむきに進み来れりさりながら苦しみ多き月日なりけり
朗かに笑はんとすれど胸うちにつまる思ひの数々ありて

東海の朝美しく晴れにけり原子電力は東京に既に

テレビの放送を見た私は、その頃茨城県日立市にある工場に度々出張する途中、電車の中から遙かに村松の海岸の松林の上に工事の櫓の立っているのを遠望しつつ、その発電の日を待っていたので、次の歌を贈った。

原子力発電成りてテレビに映りゐる作業衣の君の涙ぐましき

この拙い歌が晴れがましくも、今度出版された遺歌集「我が歌」の「あとがき」に令息が引用して下さった。実はこの歌が出来た時、の「君は」か「君見て」かと、問題にされたのである。私は「一本松さんも泣いているように見えたし、私もそれを見て我知らず涙ぐんだ共感だ」と苦しい弁解をした。

一本松氏の歌歴は、多分学生時代に溯ると想像される。昭和七、八年頃、一本松氏の上役で俳句の好きな「紫水晶」の俳号を持つ人に薦められて、私も一度だけその運座に出席したが、一本松氏は見えなかった。

昭和二十四年の夏、米国の電力事情調査から帰えって来られて、「関西電力と同規模の会社で従業員は一万人位。それに対してこちらは一万六千人」と話され、米国の合理化についてのお話しを承った。この帰朝歓迎の意味でT氏、O氏と一夜会談した。その席上で、一本松氏は

京の宿よき友のあり女あり今宵の酒は飲むべかりけり

と若山牧水調の歌を短冊に書かれた。その席にお酌に出た「お房」という婦人は、山田正太郎門下の長唄の名手で、美声の上に酒が強かった。私は一滴もいけぬ下戸で、一本松氏、T氏、O氏も強い方ではなかった。そこで私はお房に代って、ざれ歌を返歌した。

お房にもお流れ少し賜べよかし今宵の殿方みな酒よわき

二つの短冊は、集った家に残して帰えった。その家の近くには大石内蔵助の遊んだという伝説の家もあり、又維新の志士達を知っているという人も居る位で、その家も主人は代ったが今も商売をしている。短冊が残っていないかと、昨年春探して貰ったが出て来なかった。ほんとに惜しいことをしたと思っている。

(61・1・24)

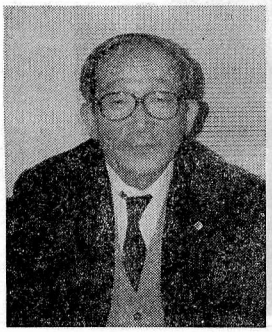
講習所卒業の皆さまへ

陽春の光もさわやかな好季節となりました。同窓の皆様卒業以来七十一年から四十六年の春を迎えましたが、お元気でお過しのことでしょうか。皆様のご身辺にもいろいろのことがおありのことと思いますので、その後の報告なども兼ねて思い出の京都で、洛友デルタ会全国大会を開催講演会と懇親会とを催しますので、ご出席くださいますようお願い申し上げます。なお、ご出席のお方は左記神戸俊夫幹事長までお申込みくださいますようお願いします。

記

一、日　時　昭和六十一年九月十四日（土）午後一時
一、集合場所　近畿地方京都発明センタ（詳細は別に連絡します）
一、講　演　京都大学教授　川端　昭先生
一、懇親会場　京都市中京区河原町竹屋町東入「石長」
懇親会　同日午後六時より
一、会　費　懇親会のみ　金一〇、〇〇〇円
一泊（朝食付）　金一五、〇〇〇円
一、申込期日　昭和六十一年五月三十一日まで
一、申込先　京都市左京区修学院水上田町八―一　神戸俊夫
電話　〇七五―七一一―七八七五
一、振替口座　京都―三―三九八五

大槻善三郎君を偲ぶ



大嶋　幸一
（昭和十九年卒）

友人として謹んで大槻善三郎君のご霊前に最後のお別れの言葉を捧げます。

現し世の悲しき定めとは申し乍ら、つい先日まで元気に話し合いゴルフに打ち興じましたのに今日こうしてお別れの言葉を申し上げるとは未だに信じられない気持で一杯です。

君の輝かしい生涯、社長として今日の如く会社を立派に育てられた功績等に就ては葬儀委員長が述べられた通りでありますので、私は二三の思い出を申し上げ在りし日の君を偲びたいと思います。

善さん、四十年前の愛称で呼ぶことを許して頂きますが善さんと私は中学が同じく京都府立二中の卒業、又大学では共に京都帝国大学で電気工学を学び更に卒業時の戦争のさ中には一緒に海軍を志願して技術将校として同じ宿舎で同じ釜の飯を食い戦火の下文字通り生死を分ち合いました。

善さんは学生時代から大人物で、風貌は誠に春風駘蕩、小さいことには拘わらず反面細かいことによく気のつく世話好きの好人物として人望が厚く、何くれとなく友人の面倒をみたり同窓会の世話をしてくれました。殊に私達の大学時代は戦争の真つ最中で極端に物のない時代でしたから自宅が京都の善さんは地方から出て来ている友人に何くれとなく便宜を計り皆から喜ばれておりました。その後同窓会を開く度にその頃の物不足の苦しかった想い出話を懐かしく語り合ったものです。

私共の第一の母校京都二中は戦後の学制改革の際不運にも廃校となりましたが伝統ある二中を何とか復活したいと卒業生全員が望んでおりました。善さんは京都大学の恩師松田長三郎先生、平沢興元総長、梅原龍三郎画伯等の諸先輩及び後輩を動かしてこの運動に打ち込みその熱意が実を結んで奇くも二中創立八十五周年の記念すべき一昨年、府立鳥羽高等学校として生れかわりました。決まった時の善さんの喜びよう笑顔は今も尚私の瞼に灼きついて離れません。鳥羽高校開校記念式場で新しい校旗と、夏の全国野球大会第一回優勝校京都二中に贈られた優勝旗に並んで撮影した記念写真が善さんを偲ぶ貴重な写真となりました。

京都大学の同期会でも善さんは会の大黒柱でした。茫洋として誰をも包み込んでしまう大人の性格、ユーモア豊かな話術は同期会を取纏める適任者でもありました。先般四十周年の総会をご夫人同伴で京都で開きましたが総会々場の設営、予約の大変難しい桂離宮・修学院離宮参観の手配やゴルフ場の予約と大車輪の活躍で、特に奥様方に喜んで頂き、その後は家族ぐるみのお付き合いに発展するという嬉しい同期会となりました。これも善さんのお蔭と会員一同大いに感謝しております。

今考えるとこの時のゴルフが私との最後のゴルフとなりましたがこの日善さんは大変調子がよく優勝してしまいました。「幹事が優勝賞品をもらってもよいのかな」と云ってはにかみ乍ら私から賞品を受取った時の何とも云えぬ笑顔が今も尚私の脳裏から離れません。ご家族から聞きますとこれが最後のゴルフであり最後の優勝であったとのことです。

昔の十年が今は一年といわれる技術革新の激しい今日この頃のこと、善さんと社長室で最近の技術動向や新技の開発について話し合ったのもつい最近のことでした。

このような難しい時代に君を失ったことは会社にとって大きな打撃であり善さんも心残りでありましょう。

然し乍ら幸いにも善さんは立派な後継者と技術者をお育てになっておりました。ご安心下さい。新社長を戴いて全社一致協力して善さんの遺志を体して事業の発展に捨身の努力を尽されると伺っております。

母校京都二中のこと、京都大学時代のこと海軍時代のこと、経営者としての善さん、思い起せば善さんを偲ぶ思い出は尽きません。

茲に四十有余年に亘る交友と暖かいご交誼に対し厚く御礼申し上げ安らかなご冥福をお祈りしてお別れの言葉と致します。

（昭和六十一年二月十三日）

電気系教室だより

昭和60年度電気系教室卒業生の進学・就職状況

電気工学教室主任　林　宗明（昭27卒）
電子工学教室主任　田丸啓吉（昭33卒）
電気工学第二教室主任　上田晥亮（昭34卒）

電気系教室の昭和60年度卒業生の進学ならびに就職状況についてご報告申し上げます。

本年度卒業生は別表にありますように、学部百八名、修士課程七十七名であります。うち進学者は学部七十八名、修士三名で、学部学生の進学者数が多いため、就職致しました学生数は、学部三十名、修士七十三名でありました。

就職状況につきましては、本年も産業界の広い範囲の企業より多数の求人をいただき、十月中には大部分の就職が決定いたしました。限られた数の卒業生のため、ご熱心な求人のお申込みに十分応えることができず、ご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。卒業生の就職先は別表の通りであります。

毎年のことながら、就職について洛友会会員諸兄には何かとご高配、ご援助を賜わりましたことに御礼申し上げると共に、今後とも変らぬご支援を賜わりますようお願い申し上げます。

種別	学部	修士	就職先
官公庁	0	3	郵政省，宇宙開発事業団，工技院
電力	5	6	関西電力，中部電力，四国電力
通信・放送	1	7	NTT，KDD，NHK，関西TV
電気・電子機器	14	35	日立，東芝，三菱電機，松下電器，三洋電機，ソニー，シャープ，日本電気，富士通，IBM松下電工，日新電機，安川電機日本電装
電線	0	4	住友電工，古河電工
機械・自動車	2	2	トヨタ自動車，久保田鉄工
精密機械・計測	3	3	キャノン，ミノルタ，島津製作所，YHP　横河北辰電機
鉄鋼	1	5	新日鐵，川鉄製鉄，神戸製鋼
化学・ガス	2	2	大阪ガス，旭化成，原子燃料工業
電鉄・航空	0	4	阪急，近鉄，日本航空
その他の会社	2	2	朝日新聞，日経マグロウル，第一勧業銀行　東芝エンジニアニング
小計	30	73	
進学	78	3	
その他	0	1	
計	108	77	

教官の異動

前号のお知らせ以降、つぎのような異動がありました。

河野　俊彦
昭和61年3月31日、電気工学第二教室（上田研）助手を退職、福山大学助教授に転出（昭和42年立命館大学修士課程修了）

井上　嘉明
昭和61年3月31日、電気工学第二教室（上田研）助手を退職、滋賀県工業技術センターに転出（昭和40年電気工学第二学科卒）

垣本　直人
昭和61年4月1日、広島大学工学部助手より、電気工学教室講師に昇任（昭和50年電子工学科卒）

その他、電気系教室図書室関係では、事務官新田美都子さんが1月31日付で退職、事務官青合薫さんが2月1日付で教養部図書室へ、事務官中尾富貴子さんが化学工学教室より電気系図書室へ配置換えになりました。

同窓会だより

昭和十三年卒同窓会

去る十月二十・二十一の両日、福井地区で左記十八名、夫人五名合計二十三名の出席を得て開催された。

熱田、伊藤、片岡、国富、小林近藤、副島、伊達、富永、南部平野(彰)、的場、福崎、真弓、皆川、山本(健)、山本(三千雄)大谷

（片岡、小林、副島、皆川、大谷は夫人同伴）

先づ初日の昼過ぎ敦賀駅に集合、バスに乗って日本海岸を北上

し、越前海岸独特の風景を楽しみ、三国町の資料館を見て芦原温泉で一泊、懇親会で旧交を温めた。

翌日もバスで先づ永平寺を参拝（写真参照、前列右から副島、小林、大谷、皆川、片岡各夫人）、精進料理の昼食後、一乗谷の朝倉遺跡で往時の盛衰史を偲び、次いで今立町の越前和紙の里を訪れ、各自で和紙の手漉きを体験、高速道路を経て午後三時頃福井駅で解散した。

幸い両日共好天に恵まれ楽しい二日間の旅であった。次回は六十二年に卒業五十周年の会の打合せを兼ねて関西地区で開催することとし、これからも一層健康に留意して再会を約して解散した。

（幹事　大谷記）

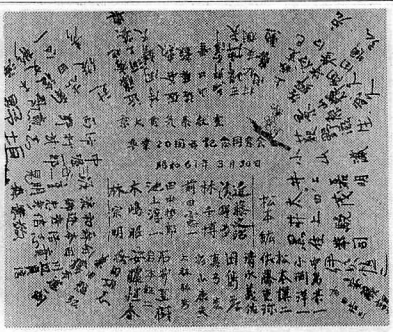
昭和四十年卒業生同窓会

昭和四十年学部卒業生、ならびに、昭和四十二年修士課程卒業生の『卒業二十周年記念同窓会』を、昭和六十一年三月三十日(日)、京都大学電気総合館ならびに京大会館においておこなった。六十一名という多数の同窓生が出席するとともに、八名の先生方のご臨席も賜り、盛大な会となった。

第一部は、電気総合館において、十一時より、とりおこなわれた。まず、電気工学科主任の林宗明先生より、京都大学電気系教室の近況をお伺いした。名誉教授の先生方の近況、電気系教室の組織と研究状況、昭和六十年度卒業生の就職状況、昭和六十一年度新入生の入学状況等を伺った。ついで、同窓生の中の異色の存在である弁護士の安藤恒春氏より、私の体験という題で、何故電気系を卒業して弁護士になったかという話や現在係わっている事件に関する話を聞いた。最後に、富士通勤務の太田茂氏から、最近同氏が始められた『福祉システム研究会』についての話を聞いた。この研究会は、エレクトロニクスを障害者の方に役立てることを狙いとしている。洛友会のメンバーの方で、この研究会に関心のある方は、町田市山崎町一三五六―アイハイツF七〇一、太田茂氏（TEL〇四二七―九一―三一七〇）まで、連絡してくだされば幸いです。

第二部は、場所を京大会館に移して、十二時より、とりおこなわれた。まず、九州大学の上林弥彦氏が、卒業生代表あいさつとして、同窓生の大略的な近況を、先生方に報告した。ついで、前田憲一先生から、激励の言葉を賜った。そして、林千博先生のお話ならびに乾杯の音頭の後、歓談に入った。しばらくたって、話も少し落着き、アルコールも少しまわり、お腹も少し満ち足りた頃、ご臨席賜った清野武先生、田中哲郎先生、近藤文治先生、池上淳一先生、木嶋昭先生、林宗明先生から、お話を賜った。そのあと、同窓生のスピーチに移った。皆、社会の中堅となり、話もうまくなり、一人三十秒ないし一分という制約を超えて話をする人が続出し、予定時間をオーバーしてしまった。そのために、一部の方にスピーチをしてもらえなくなってしまいました。この場を借りてその方々にお詫びいたします。スピーチの後、一同で記念撮影をした。先生方をお見送りした後、『新生のいぶき』、『紅燃ゆる』、『琵琶湖周航の歌』の大合唱で、幕を閉じた。

五年後の二十五周年に、東京での再会を期して、名残りを惜しみつつ散会した。次回の幹事は、日本電気、富士通、富士電機勤務の同窓生の方々にお願いした。その中で、今回の出席者は、清水義佑氏、真弓宏氏、太田茂氏、堀重明氏であった。今回の幹事は、三菱電機勤務（元も含む）の同窓生でつとめさせていただきました。何かと不行き届きの点があったかと思いますが、どうぞご容赦下さい。



会員寄稿

ソ連、東欧旅行記 ②

昭20卒　老田他四郎

昔の王宮（一五世紀）のフランヂスホールの展望台からはモルダウ川をはさんでカレル橋、テイーン教会、リコテス教会、オペラハウス、プラハ市内が絵のように展開していました。この王宮は戴冠式が行われ、国会の場ともなっていたのですが、共和国となってからは大統領選挙に使用されています。王座のある部屋には、フランシスコ一世、レオポルド二世、フランチスロートレイ王、マリアテレジアの大きな肖像が壁に飾られています。

カレル橋は聖書に基づき造られ、ゴシック風で、聖バスラスの像、聖ビートの像など片側に十五づつ、合計三十体の大きな立像と橋下に中世の騎士の像が一体あります。プラハには国民劇場、スメリナ博物館、同音楽学校、ドボルザークのコンサートホール、プラハ劇場、アマデウスのロケ場所など芸術の都である（昭和五五年七

月高島屋でプラハ国立美術館展を見た)。古い町の広場の市庁舎の天文時計の青い窓二つから丁度六時に鐘の音とともに、十二使徒がぐるぐると出てくるタイミングの良さもありました。

ヨゼフ王がユダヤ人を市民として認めてからマイゼルの丘にユダヤ人の町がありますが、シナモン(ユダヤ人の教会)、ユダヤ人の墓地もみました。庁舎の頂上に時計が二つあって、一つは文字盤が逆で針も逆に動きます。

プラハからブダペストへは九時間半の夜行寝台列車、異国の列車は物珍らしく、寝台・洗面所つき、棚など合理的であるが、今までポーターの役であった大きなトランクの運搬は男性の役目で閉口しました。

ハンガリーへの入口は朝六時頃、四十分停車の車中パスポート検査でOK。朝やけの中を列車はドナウ川に沿って走り、七時五〇分にブダペストに着きました。ドナウ川はウイーンでは運河、ハンガリーではドナウの女王と呼ばれ、川を狭んでブダ地区、ペスト地区に分れ、一九世紀に統合、八つの橋が架けられました。それまで、オスマントルコが一五〇年間占領し、ハプスブルグ家の支配が二〇〇年一九世紀まで続きました。

英雄広場には中央アジヤからきたマジャール人の七種族の騎馬像、後のコラムにハンガリー歴代の王の像(左に七人、右に七人)、白い無名戦士の墓、近代と古代の美術館がありました。バスの窓からは、ソ連に解放された記念の女神が月桂樹をささげている第二次大戦記念碑(高さ三四m)、スポーツセンター(八万人収容)、オペラハウス(入口にリストの像)、バレー学校、国会議事堂を見て、バルゲリー橋を渡り、聖マシアス教会に着きました。途中、金色の三日月の飾りを建物の頂上に見受けたが、トルコ支配の名残りとか。

一五世紀にマシアス王が聖マシアス教会で結婚式をあげています。礼拝堂にはアダベルト四世の墓がありました。ステファン王(一〇世紀)の騎馬像をはさんで、見晴しの良い漁夫の砦があります。最も古い鎖橋を渡って船付場に到着、五時半から一時間三十分にわたって遊覧船によるドナウ川クルーズを楽しみました。橋を幾つもくぐり、大戦の記念碑や国会議事堂が夕日に映え、水面ではカヌーの練習風景が水すましのように続きました。

夕食は八時半からハンガリヤ料理にハンガリアンダンス等のショウ、所謂グヤシ・パーティに参加です。各国のツアーの連中が三〇〇人位いで賑やかなこと。民族衣装を着た美人のダンス、独唱の合間をぬって、司会者が客の中から五人位を舞台に呼んでワインの樽移し、風船割り、歌のお稽古、椅子とりゲームなどで、軽妙洒脱な運びに笑いの連続です。勝者には金・銀・銅のメダルが渡され、副賞はワインでした。当方からも代表が出ましたが、体力的にはかないません。サムライ、サムライと司会者から激励されましたが。楽しい雰囲気のうちに三時間位がすぐに経ちました。

ブダペストからウイーンへのバスで二時間位でギョールに到着。朝市(大へん品数が多く活溌な取引き)を見て(ハンガリーの通貨は前夜に処分したので果物一つ買えません)司教の家を勝手に?つき抜けると、しばらくしてナポレオンが一八〇九年八月に住んでいた家があり、博物館になっています。昼食は一三世紀から続いているバスカカス・タベルナ、入口にシンボルの鉄の鳥が飾ってあります。

日本の国境は海、ヨーロッパは陸続きで何となく変です。ハンガリーの国境の時はヘジェシャローブ、オーストリアはニッカーフドルフ。出入口審査は二五分、一〇分と簡単に終りました。オーストリアは日本人大歓迎で、フリーパスに近いようです。

ウィーンのエルドラドパークホテルも近代設備そのものでした。室内テニスコート(三面)あり、サウナあり、マッサージ室あり、レストランは八、〇〇〇㎡位の温泉プールを見下ろし、天井はガラス張りの大きなドームです。ホテルの売店で初めてポルノ雑誌にご対面です。

ウィーン観光は普通は北部のウィーンの森にでかけるのですが、私達は南の方の森へ行きました。一二世紀のリヒテレシュタイン城を通り、シーグロッテという石灰石鉱山を見ました。外気は二六℃ですが、地底湖のある坑内は九℃とひんやりします。第二次大戦中ナチスが二千人の囚人を使って飛行機を製造した工場跡で沢山の遺物がありましたが、哀れを誘うのは運搬用の馬は坑内でもあり、暴れるのを防ぐため両眼をつぶしたそうです。所々にあるグリック・アウトという標語がむなしい。シューベルトが冬の旅を作曲した家(一九二八年)に寄り、果てしなく続くウィーンの森を走り(バスの車内にウィーンの森の物語の曲が流れる)ハイリゲン・クロイツ(聖なる十字架)の修道院につきました。ロマネスク風の教会(一三世紀)バロック様式の塔(一八世紀)のある中庭にペストの終焉を祈願したペストの像があり、近くの墓地には、うたかたの恋の乙女(ルドルフ皇太子、ピストル自殺)が葬られていて、カルメル教会の修道女が冥福を祈っています。教会にはステンドグラスがつきものですが、ここではゴチック風で綺麗でした。

次いで廃虚の城、ラウヘンスタイン城(一二世紀)を通り、温泉地のバーデンへ。ここでベートウベンが第九を書いた由。一面のぶどう畠を走ると教会の門前町?のように居酒屋が立並ぶグンポルトスキルヘンの町へ着く。ワインの産地で、新しいワインのある店はその印に軒先に松葉の飾りがぶら下っている。

ウィーンはウィンドモナ(心地よい風)と呼ばれ、東西南北の風の交叉点とのことです。バスは走りつづけ、糸つむぎの塔(十字軍のとき、妻が糸を紡いで待った)、市営アパートの列(年代が入っていて、古くなると塗り直す)、カール六世の館(現在は寄宿舎付の学校)、エルトナー通りのオペラ座を経て昼食。午後バスで通過したのは、ゲーテの像、モーツアルトの像、美術史美術館(昨年九月、国立西洋美術館で同館のハプスブルグ家の名画展をみた)、国会議事堂、ブルグ劇場、ウィーン

大学、スコットランド教会（この附近にも、ペストの塔（一五七九年）があった）、ペーター教会、ステファン寺院、シューベルトの像、シュトラウスの像（バイオリンを弾いている）、ベートウベンの像、コンサートハウスと誠にめまぐるしいことでした。その間、三色の噴水に囲まれ、旗を持ったソ連無名戦士の碑を見ました。

バスを下りたのは、ベルベギーレ宮殿（オイゲン公建立）、附近には大統領官邸、国際会議場、マリアテレジアの像、カール大公やオイゲン公の騎馬像があります。この宮殿は現在、美術館になっているが、マリアテレジァも気に入ってよく使用した由で、庭からのウィーン市内の眺めはすばらしい。

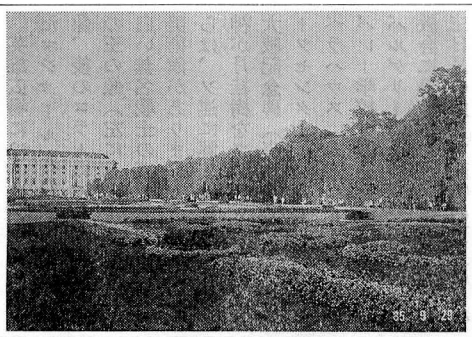
次のシェーンブルン宮殿はハプスブルク家の宮殿で、エルミタージュ・ベルサイユとともに世界の三大宮殿と称されている。現在、修理中ですが、再びマリアテレビアの好きな黄色一色になります。

一六九六年に建てられ、近衛兵の間（マイセン焼の大きな石炭焚きのストーブ）、謁見の間（フランツ・ヨゼフ皇帝）、書斉の間、寝室の間、エリザベート化粧の間、サロンの間、マリアテレジアの子供部屋、認命の間、舞踏会の部屋、中国の間、儀式の間（ヨゼフ二世とイザベラ王女の結婚、昼食会は金の食器、晩餐会は銀の食器）、漆の間、ナポレオンの間、ゴブラン織りの間、フランツヨゼフ誕生の間と豪華絢爛な内部をずーと見て廻りました。

六三〇年続いたパプスブルグ家最後のカール一世（三五歳）が譲位のサインをした机と椅子もあり、その他にもマリアアントワネット（テレジアの末娘）、マリアヨゼファ・テレジアの子孫の肖像、マリアアントアネットの遺品（カメオなど）、ナポレオンの贈物（時計）、壺、ゴブラン織り、ナポレオンの息子のデスマスクなどがある。

バロック風の庭園は赤白青の花が咲き乱れ、オーストリアの国旗を現わしており、その先には戦勝記念碑（一七七五年）がそびえている。

これをもって、モスクワからスタートした東欧四ケ国の旅も無事終りましたので、三十日の昼すぎにウィーンを離陸し、モスクワ乗り換えで、十月一日の十一時に成田へ帰りました。



ヒマラヤ杉のつぶやき ④

講昭和十三年卒　竹村　清

いよいよ、我々〝ヒマラヤ杉のつぶやき〟も終段に入ってきました。この前にお話しましたA杉（西寄）は、さすが京都大学農学部の名医先生の手当が適切であったのと早期治療の相乗効果の甲斐あってか、落葉も目に見えて減って来て、色艶も良くなって来ました。B杉（東寄）はつぶやきました。

〝A杉よ、よかったなアー。お前がこうして生き返ったので本当のところ、ホッとしている。もし、あの時、情報教室の諸先生方がお前の具合の悪いことに気付かれずに、そのままにしておかれたなら、枯れてしまって切り倒されていたかもしれない。そうなれば、俺は生涯孤独で一人で生きて行かなければならなかったかもしれない。本当に生き返ってくれてよかったなアー。〟

ここでもう一度、A杉に手厚い回生手術をしていただいた情報と農学部の諸先生に、あらためてお礼を申し上げます。

月日の経つのは早いもので、こんな回想をしている内に、三～四年が過ぎました。

それは確か昭和五七年頃のことだったと記憶しています。

前にもお話したことがありましたが、我々A杉とB杉は、情報工学教室と約一〇m程を経てて平行に植えられており、この間には、電気、ガス、水道、電話などの管や電線を入れた共同溝が埋設されております。

A杉（西寄）が弱ったのも、この工事の時に、根を痛められたり、共同溝の埋設のため、相当深く掘られたので地下水脈が変ったのが原因だったかもしれません。

B杉（東寄）がこんな回想をしている内に、今度は自分の体調がこの頃どうも変なアーと思い始めました。〝そうそう俺ももうここに植えられてから約六〇年近くなるなアー。人間様でいえば還暦に近いことになる。しかし待てよ。俺たちの仲間では一〇〇年、いや二〇〇年と生きている奴もいる。それにくらべると俺はまだヒョッコだ。しかし、この頃の体の弱り方は、どうしたことだ。まさかA杉と同じように根を切られたり、栄養不良のためなのだろうか。〟

B杉もこのことに気が付いて、〝おいA杉よ。俺がやっと元気になれたと思った途端今度はお前の番か。俺の時は、あんなに気をつかってくれたお前のためだ。今度は何とかして俺がキット恩返えしをするよ。〟

こんな会話を交ている内に数ケ月が経ちました。この頃からどうもいつもとは違う現象に気が付き始めました。

〝オイ!!A杉よ、どうもお前の根の近くで変なニオイがするゾ。お前は気が付かないか?〟〝ウン俺もそう思っていたが、俺の老臭かと大して気にもしていなかったんだが、そういわれてみると何だか変なニオイがするなアー。〟

〝A杉よ、これはヒョッとしたらお前の近くで、ガスが洩れているのではないか?〟〝嫌なことをいうなよ!!、ガスが洩れているのなら、人間様が発明したというガス検知器があるし、ましてここは天下の叡知・秀才の集りの京大の構内だ。もうトックニ判っている

筈だ。〃

〃お前のいうことは尤もだ。しかし、それも仮りに大量に洩れて共同溝に流れ込んでいる場合なら、お前のいうとおり検出されているかもしれない。しかし、もし微量づつ連続して、しかも、お前の周辺だけに洩れているとの仮定は成り立たないか？　しかもそれが原因でお前の衰弱が目立つようになったのではないか？〃

〃ウン、そういわれてみれば、同じ条件で植えられているお前と俺とでは、最近では俺の方が弱って来たようだなァ。アーアこの前のお前の時のように情報の先生方が早く気付いてくれないものかなアー!!〃

〃心配するなB杉!!キット先生方には気がついていただけるよう俺もお祈りするよ。

こんな会話を交しているある時、情報のY教授が同僚の方達とB杉（東寄）の梢を見上げて指さしながらヒソヒソお話しておられる。

〃A君どうもこのヒマラヤ杉の様子が最近変なんだ。前の時は、西寄が栄養失調だったが、今度もヒョットしたらそうかも知れない。

もしそうだとすれば早い目に農学部の先生に診断していただくよう交渉してくれないか？〃

〃先生かしこまりました。すぐ交渉してみます。〃

それからの先については、紙面の都合上結論を急ごう。

農学部で色々と調査されましたところ、B杉（東寄）は、前回と異り栄養不良ではなく、他の原因であり、その一つとして考えられることは、地中の物質だけではなく、他の物質例えば、燃料用ガス等を微量にしかも長年連続して吸収した傾向があるとの判断でした。

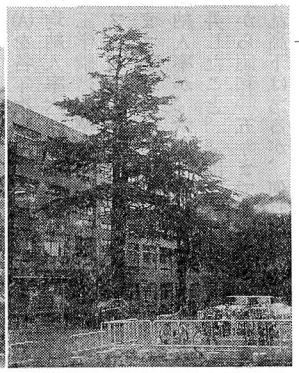
この判断に基ずきまして、情報教室ではB杉の近くの共同溝の周辺を調査されました結果、果して微量のガス洩れが検出されました。

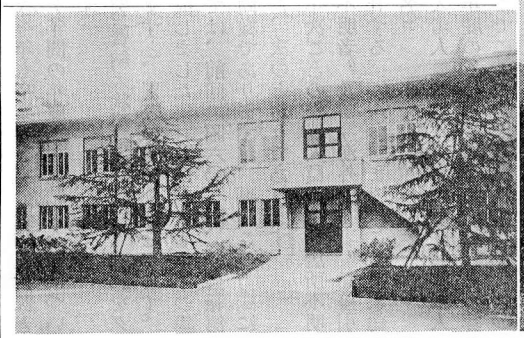
このことは、我々人間の叡知をもってしても、地下に埋設されているガス管からの微量のガス漏洩を検知することは不可能であるが、天然・自然のヒマラヤ杉が、このことを我々人間に知らせてくれたことを知ると共に、常日頃から自然を愛し、緑を大切にするという気持を持っておられた諸先生のお陰の賜物としか言いようがありません。

最後にのぞみ、思い出の二本のヒマラヤ杉を比較し、その成長を知るため、昭和七年頃と現在（昭和六一年四月）の写真を掲げておきます。このヒマラヤ杉に秘められた思い出はこれを見る人、語る人により思い出はそれぞれ異るかも知れません。しかしながら少くとも、この拙文を読まれた方は、何かの思い出があることを信じて疑いません。

ヒマラヤ杉よ!!　生ある限り永遠たれ!!

追記　この拙文は、情報工学科矢島教授のヒマラヤ杉の思い出を基にして小生が、この事実を独断で創作したもので、事実と相違している箇所があれば小生の責任です。禿筆をお許しください。





事務局だより

落丁のおわびと居所不明者連絡のお礼

六〇、六一年用名簿の発送を六〇年一二月上旬に会員各位にご発送しましたところ、印刷所の不手極により少数ではありましたが、一一三～一二八ページの間が落丁しておりました。

お申出の会員各位には、印刷所より直ちに送本申し上げましたが、会員各位にお掛け致しました。ご迷惑に対し、深くおわび申し上げます。

次に六一年新年号に洛友会会報が三回以上返送されていて居所不明に登録された方三四名の氏名・勤務先を公表しましたところ、多数の会員各位より、早速とご連絡を賜り、三四名中三二名の方の居所が判明致しました。

当然のこととは申しながら、会員各位相互間の連絡の緊密さに驚かされております。ご連絡を賜りました会員各位に紙面を借りまして厚く御礼申し上げます。今後共よろしくご支援の程お願い致します。

訂正

60・61年用名簿中、左記の会員の氏名・住所・勤務先に当事務局のミスにより誤記がありました。

該当会員各位にご迷惑をお掛けしましたことをおわび申し上げますと共に謹んで訂正致します。

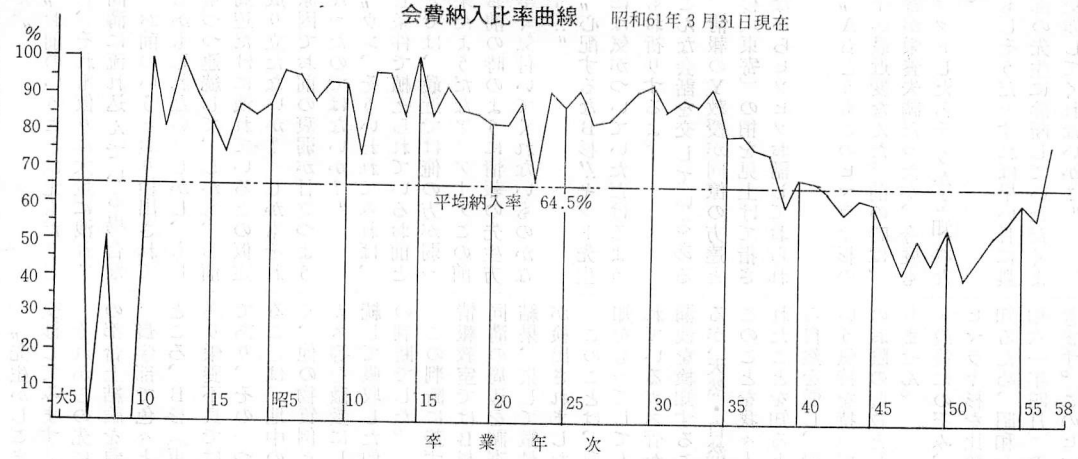
記

氏名　山縣啓利
卒業年　昭和十七年
勤務先　㈱信山社
　取締役　総務部長
住所　〒194　町田市成瀬一一二八一一　ロイヤルメゾン成瀬台
電話　〇四二二一二一一〇六五

氏名　田村博
卒業年　昭和七年
住所　〒153　東京都目黒区中町二一四七ノ七
　電話03—712—七七九三
（表中略敬称）

卒業年次別会費納入状況並びに年度別納入金額について

お陰様をもちまして、昭和六〇年度の会計業務も締切り、目下これらの集計中であります。



前年に引続き今年も卒業年次別会費納入状況と新しく過去五ケ年間の年度別会費納入金額について報告致します。

まず、年次別会費納入状況については、これをグラフに表示しますと、別表のとおりとなります。

この表を作成しました集計及び納入者比率の算定基準については、前回（昭六〇、四、一会報第一三一号）と同様でありますが、再度この方法につき述べますと、次のとおりであります。

(1) 各卒業年次ごとの登録人員から〝居所不明者〟と〝行方不明者〟及び〝海外駐在者〟を差引いた人数を集計する。(A)（参考までにこの対象総数四、四八九名）

(2) 会費納入者人員数(B)は、六〇年度会費納入者を一、五九年度のみの納入者を〇・五として算出する。（参考までにこの納入者総数二、八九七名）

(3) (B)／(A)を各年次平均納入比率とする。（参考までに平均納入率六四・五％）

(4) 電気工学講習所卒業生分は除外する。

同上グラフから六〇年度納入状況を前年と対比して推定しますと、

(1) 平均納入率が、六四・五％と前年に較べて〇・七％上昇したこと。（前年六三・八％）

(2) 大正から昭和一五年までの傾向は、前年度と大差なく乱高下はあるが、何れの年次も平均納入率を大幅に上廻っている。

(3) 昭和一六年から三五年までの二〇年間で、前年と異なる点は、特異年を除けば、カーブが平坦となり、かつ平均納入率が上昇している。

(4) カーブの降下点は、前年と同じく三五年からであるが、前年はこの降下が急激に四五年まで続いたが、今年はこれがやや緩やかとなっている。

(5) カーブの降下点が平均納入率と交叉する年次は、前年は三九年であったが、今年は四一年である。

(6) 前年に比して平均納入率を割る年代が伸びてかつ、底が浅くなり、乱高下が少なくなっている。

(7) 五八年以後は、前回にも述べたように、学部卒業、又は修士課程修了時に本部会費のみ徴集するので、正確な納入率の算出は困難なため記載しない。

次に過去五ケ年間の年度別会費納入額については、これを万円単位で列記しますと次のとおりとなります。

昭和五六年度	六六二万円
昭和五七年度	七一五万円
昭和五八年度	八四八万円
昭和五九年度	八四二万円
昭和六〇年度	

ここで特に五九年度の納入額が他の年度に較べて突出しているのは、この年度は、本格的に居所不明者の調査を行った結果ではないかと、自画自賛しております。

今後共、本会運営の根本であります会費納入についてはよろしくご協力の程お願いします。

編集後記

今年は例年になく寒さが続きましたが、季節は正直なもので、桜花も既に葉桜となりました。会員各位にはお元気でお過しのことをお慶び申し上げます。

毎年四月号の発行は、記事の都合によりまして遅れますが、今年はとうとう発送が五月になり、誠に申訳なく思っています。

本洛友会も年々新進気鋭の新会員を迎え、会報の発行部数も一つの節目である五〇〇〇部を越えました。

この五〇〇〇部全部がお手元へ無事着きますようにと日夜？努力していますが、毎回一％程度の返送があるのは、残念でもありますが、致し方のないことかもしれません。

今後共、洛友会発展のため、よろしくご指導、ご支援の程お願い致します。

（竹村記）

訃報

講大5	赤羽	四郎	60・12・22
講大6	犬伏	庄平	61・3・18
大13	巽	良知	61・4・6
講大14	西田	三好	60・12・27
講大14	吉田	寛一	61・3・8
大15	吉村	敏恭	60・12・18
昭4	竹下	亀蔵	61・1・13
昭6	古田	久一	61・4・9
講昭6	田中	健治	60・1・4
講昭12	木島	行之	51
昭19	大槻善三郎		61・1・31
昭21	神原	道晴	59・5・7
昭27	塩谷	戒三	59・8
昭34	坂本	英夫	61・2・28

以上の方々がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。